

2025年度（第2次） 神戸市外国語大学大学院入学試験
日本アジア言語文化専攻 アジア言語文化領域
解答例・出題意図

設問 1

[出題意図]

言語研究を行う上で基礎となる言語学の専門用語の理解が正しく行えているか、具体例を出して、簡潔に説明できるかを把握する目的で出題した。

[解答例]

(1) 句構造規則

句構造規則(Phrase Structure Rules)は、生成文法の標準理論で考案された、文を構成する要素の階層的な関係を規定する文法規則である。例えば、英語の基本的な句構造規則には次のようなものがある。

1. 文 (S) → 名詞句 (NP) + 動詞句 (VP)
例: John reads books (S) → John (NP) + reads books (VP)
2. 名詞句(NP) → 決定詞 (Det) + 名詞 (N)
例: the dog (NP) → the (Det) + dog (N)
3. 動詞句 (VP) → 動詞 (V) + 名詞句 (NP)
例: read books (VP) → read (V) + books (NP)

句構造規則は同一範疇に対し、回帰的に適用できる性質を持つ。

(2)使役

使役は、ボイスの一種であり、普通態に比べて使役者の項が増え、結合価が1つ上昇する特徴を持つ。意味的には因果関係を中核にもつ。日本語では「子どもが勉強する」という普通態に対し、「親が子どもに勉強させる」という使役態を作る。使役は動詞に接辞を加えることで形成される場合もあるが、日本語の「死ぬ」と「殺す」のように、語彙的使役が存在することもある。また構文上の特徴として、日本語では動詞に「させる」が付加されるだけでなく、普通態の主格の「が」が使役態では与格の「に」に変わるなど、格標示の交替も生じる。

(3) 二重分節

二重分節とは、言語が無意味な音(音素)を組み合わせることで意味のある単位(語や形態素)を作るという仕組みを指す。この概念は、フランスのマルティネによって提唱されたが、アメリカ

2025年度（第2次） 神戸市外国語大学大学院入学試験
日本アジア言語文化専攻 アジア言語文化領域
解答例・出題意図

のホケットも同時期に提案している。音素のレベルを「第二次分節」(意味によらないレベル)、語/形態素のレベルを「第一次分節」(意味によるレベル)とよぶ。例えば、英語の「cat」は /k/, /æ/, /t/ という無意味な音素から成るが、これらを並べ替えると「tack」や「act」といった別の意味の語になる。

(4) 一致 (agreement)

文中の単語が文法的な要素(人称・数・性・格など)に応じて形態を交替させる現象を指す。例えば、英語では *I am* や *he is* のように、主語の人称に応じて動詞の形が変わる。一部の言語では、名詞と形容詞の間にも数や性の一致が必要で、フランス語の *le grand homme*(大きな男)と *la grande chaise*(大きな椅子)などが例である。これは homme「男」のような男性名詞の時は形容詞「大きな」を指す *grand* はそのままであるが、*chaise*「椅子」のような女性名詞では形容詞が一致して *grande* のようになる。*Le* と *la* はそれぞれ男性名詞・女性名詞と一致する冠詞である。英語では一致の範囲は限定的だが、フランス語やドイツ語、スワヒリ語などではより広範な一致が見られる。

(5) ピッチ (pitch)

ピッチとは音の高さを表す心理的単位である。これを日本語では語彙の意味の区別に用いる。このような言語を「ピッチアクセントの言語」ということがある。例えば、「雨」は「あ」が高く、「め」が低いが、「飴」は「あ」が低く、「め」が高く発音される。ピッチアクセントを持つ言語としては他に朝鮮語を例に挙げることがある。

(6) (音の)弱化 (weakening)

音の弱化 (lenition) は、歴史言語学において、子音が「発音上弱まる音変化」を指す。一般的に、無声音が有声音化(例: ラテン語 *vita*「生命」→ スペイン語 *vida*)、破裂音が摩擦音化(例: ラテン語 *lupus*「狼」→ スペイン語 *lobo*)、摩擦音が脱落(例: 古英語 *hlāf*「パン」→ 現代英語 *loaf*) するなどの変化が含まれる。弱化は特に語中や語末で生じやすく、発音労力の減少や音の連結の影響を受ける現象である。

(7) 言語の経済性

言語学における「経済性の原則」とは、言語の音韻・形態・語彙・統語の構造が「簡潔さ」と「明確さ」のバランスを取ることで最適化されるという考えである。例えば、言語に多くの音素

2025年度（第2次） 神戸市外国語大学大学院入学試験
日本アジア言語文化専攻 アジア言語文化領域
解答例・出題意図

や機能語があれば聞き手には理解しやすいが、話し手には負担が増える。この原則は、言語変化が極端に難しくならないことを予測する。よく知られるものに、経済性と生起頻度との関係性を論じた「ジフの法則」がある。これは高頻度で現れる語彙・表現の長さは短くなることを表しており、「ただいま戻りました」>「ただいま」のように場面が固定された挨拶言葉などはその典型例であると言える。

(8) 反意関係

対義語の関係の一つである。一方を否定しても、必ずしも他方を含意しない関係が認められる場合に当てはめられる。例えば、「大きい」と「小さい」は反意関係にあると考えられるが、その否定形式である「大きくない」は必ずしも「小さい」を含意せず、逆に「小さくない」は必ずしも「大きくない」を含意しない。動詞にも認められ、「増える」と「減る」はその例の一つである。

(9) 音の脱落

言語学における「脱落(または削除)」とは、共時的には単語やフレーズ内で1つ以上の音(母音、子音、音節全体など)が省略される現象を指す。特に、語尾の音が省略されて2つの単語がつながる場合にも使われる。例えば、英語では語末の /t/ が前後に子音があると脱落しやすく、「first light」は「firs' light」(/fɜrs laɪt/) のように発音される。一方、通時的な変化としても観察される。例えば、英語の know や knee などでは元来有していた k が脱落した音が現代では行われている。

(10) 受益(態)

ある動作などから利益や恩恵を得る事態に対する言語表現として「受益」が用いられる。日本語の場合は動詞における授受表現がこれに関与する。他者から自己に対して恩恵が与えられる場合、「～てもらう」を用いるが、他方、自己から他者に対して恩恵を与える場合は「～してあげる」となり、恩恵の方向性によって異なる動詞が用いられる。例:「私は花子に宿題を教えてもらった」「私は花子に宿題を教えてあげた」など。

また、これを動詞のボイスとして組み入れる言語もあり、一般的には「適用態」(applicative)として知られている。

2025年度（第2次） 神戸市外国語大学大学院入学試験
日本アジア言語文化専攻 アジア言語文化領域
解答例・出題意図

設問 2

[出題意図]

志願者が修士課程入学後に進める研究計画が着実に実行できるかを測る問題として出題している。志願者が提出しているテーマにそって、その研究の背景や基礎知識、先行研究の理解が正しく行えているか、具体例などを提示して説明できるか、などを問うものである。

志願者が日常から先行研究を丹念に渉猟し、専門用語やテーマを理解し、日本語でアウトプットする訓練を行なっているかを把握するために出題した。

解答例は受験生の論述の自由度を大きく制限する可能性があるため、省略する。